

宮沢賢治と〈農〉 — 農業技術者の側面 —

奥山文幸

要 約

本稿では、宮沢賢治における農業技術者としての側面を考察した。

宮沢賢治の科学観、自然観には、自然というものは変えられるという考えがある。宮沢賢治の場合、自然のその変え方が急激である傾向がある。彼は、科学者というよりも、日々の現実的課題を実習や実験によって解決しようとする農業技術者であった。

1

宮沢賢治といえば、科学と宗教、そして文学が一体化した詩人・童話作家として知られている。そのような視点から書かれた論文も多い。しかし、宮沢賢治における科学とは何か、あるいは、宮沢賢治における宗教とは何かという根本的な問題を普遍的に共有できるまで論究することは難しい。各論者の科学観や宗教観が多様であることに応じて各々多様に展開されていくので、先行研究の蓄積がうまく継承されないまま論文の数だけは増えていくという事態が現在も続いている。科学という言葉や宗教という言葉が多義的でありすぎることもある。そして、宮沢賢治の人物像がこれらの科学観や宗教観と関連付けられて論じられると、一体どれが実像なのか判定困難になるほど多様な賢治像が生み出される。歴史的な人物を調べていくと、その人物について少なくとも二つの側面、すなわち、人生においても性格においても相反するような側面があることが多いが、賢治の場合はもっと多面的な人物像が浮上する。さらに、宮沢賢治における文学観の特異性もあり、賢治作品の文学史的な位置付けは難しくなる。

加藤周一は、『日本文学史序説』下巻（筑摩書房、1980年）の第十一章「工業化の時代」において、「西洋文学の翻訳の洪水と科学（技術）的な術語の日常語への侵入」が「横光利一の生硬な文体を生んだ」と指摘し、次のように述べた。

横光の語彙をもって詩を作ることは困難である。しかし横光の語彙のすべてを遠避ければ、詩は詩人の住む「現代」から離れざるをえないであろう。「現代詩」にとってのこの基本的な問題は、両大戦間にあらわれて、第二次大戦後の今日まで及ぶ。その解決はまだ一般的にはない。しかし、詩人の側における特殊な条件と特殊な工夫が、一種の解決を見出したことも、なかったわけではない。そうして全く独創的な詩的言語を発明したのは、——またまさにその詩的言語の力によって、今日まで多くの読者をひきつけてきたのは、岩手県の農業技師、宮沢賢治（一八九六～一九三三）と、東京の街に彷徨った詩人、中原中也（一九〇七～一九三七）である。

宮沢賢治を簡潔に「岩手県の農業技師」と規定することに、筆者は鮮やかな印象を持つ。そこには確かに加藤周一の批評が明示されていたからである。中原中也は「東京の街に彷徨った詩人」であり、それに並置して宮沢賢治は「岩手県の詩人」ではなく「岩手県の農業技師」という規定である。つまり、加藤周一は、賢治が「岩手県の農業技師」であったことに賢治の詩的言語における「特殊な条件と特殊な工夫」の根源をさぐり、「現代詩」にとっての「この基本的な問題」について賢治における解決を見ようとしているのである。

加藤によれば、宮沢賢治は「農民と共に生きていた」のであり、「その田園をうたい、民話に近い童話」を書き、「岩手県の方言をその詩に活かし」、「擬声語を駆使し、湧きあがるように律動的な言葉で、たとえば村の踊り」をうたったのである。

加藤周一は、宮沢賢治における宗教と科学については以下のようにまとめている。

宮沢賢治は浄土真宗の家に生まれ、少年のときから「法華経」を読んでいた。後には熱心な日蓮宗徒となり、仏教用語には日常生活において親しんでいたはずである。また、農業技術者として、地質学や化学の技術的な専門語も、熟知していたにちがいない。その事情は、横光利一の場合と大いに異なる。小説家横光は、彼にとって目新しく、その定義さえもおそらく知らなかったであろう科学的術語を、その小説にいわば装飾として用いた。宮沢賢治は、彼の日常会話のなかでの言葉、たとえば「気層」や「二相系」を、「修羅」や「微塵」と共に、その詩のなかで駆使したのである。

拙著『宮沢賢治『春と修羅論』——言語と映像』（双文社出版、1997年）において、筆者は、賢治が農学校教師であったことや羅須地人協会をつくったことなどを考慮にいれたとしても、農村における自身の他者性こそが宮沢賢治の文学的原動力であったという趣旨のことを述べた

が、そのことと加藤周一の見解とは対立するものではない。「工業化の時代」にあつて「詩人の側における特殊な条件と特殊な工夫」の内実を具体的に探り、科学的術語を詩に「いわば装飾として用」いるのではなく、詩人の内奥からあふれ出るものをより正確にスケッチしようとして駆使する饒舌なまでの表現の軌跡をたどろうとすると、例えば、前述した拙著の内容になるだろう。

中原中也が「東京の街に彷徨った詩人」であるとすれば、宮沢賢治はイーハトブという虚構世界の生成を重ねつつ岩手の自然に彷徨った詩人であったのだ。問題は、どのように「自然に彷徨った」のか、あるいは、どのような歩行によって作品が生まれていったのか、ということになるが、すでに述べたことも多く、本稿ではそれを再び論究する余裕がない。

2

宮沢賢治について生涯を通して言及してきた吉本隆明は、賢治における宗教、科学、文学の関係を広く深く考えることのできた評論家であった。宮沢賢治に関するその思考の特徴は、例えば、『宮沢賢治の世界』（筑摩書房、2012年）における以下の引用部分に顕著である。

宮沢賢治は大変な農業科学者ですが、来世が存在するというを科学者として信じられるのかということが問題です。宮沢賢治という人は、そここのところで思い悩んだとおもいます。自分の抱えている宗教観と、科学者として身につけている自然認識や物質についての認識、農業についての知識がどこかで一致する点はないか、どこかで一致させることができないだろうかと本気になってかんがえ、本気になって悩んだとおもいます。その問題が、宮沢賢治の文学や芸術と、宗教思想とのかかわり方を決めていく大きな問題になったとおもわれます。

宗教と科学、そして文学という三者の一致点を探求しようとして悩む賢治像の提示は、宮沢賢治のことを考察する際に、時代を超えていつまでも新しい問題を提起することになるだろう。なぜなら、三者の一致点は永遠の課題であり、おそらく実現不可能な課題であるからである。むしろ、そのことに悩み、多くの挫折を体験することによって、賢治は結果的に思考の大いなる実験を敢行したのであり、現代の読者にも新たな問題を提起し続ける作品を残したと言えよう。

再び吉本の『宮沢賢治の世界』によれば、宮沢賢治の科学観、自然観の「とても大きな柱の

一つ」が、「自然というのは変えられる」、言い換えれば、「天然自然というのは必ずしも最上の自然ではない」ということになる。天然自然を岩手の農民にとって実り多い自然に変えていくために「岩手県の農業技師」宮沢賢治は努力するのであり、吉本も指摘するように「宮沢賢治の文学作品、童話の中で科学をどうかんがえるか、エコロジーをどうかんがえているか、一番明瞭に優れた表現で書いて」いる作品が童話「グスコブドリの伝記」ということにもなる。

さらに吉本は、宮沢賢治の科学観、自然観の「もう一つの大きな柱」は「人間も、動物も、植物も、生き物としては平等だという考え方」だと述べる。この点について、筆者は、「平等」というキーワードではなく、「パラタクシス（並列）」というキーワードでとらえてきたので、本稿では繰り返さない。表現論でいえば、象徴の美学に対するアレゴリーのあり方であり（拙著『宮沢賢治『春と修羅論』——言語と映像』、『宮沢賢治論——幻想への階梯』など）、その表現をささえる世界観や歴史観でいえば、ロマン主義的な垂直的思考に結びつきやすい象徴の思考には収斂していかないパラタクシスの方法（拙著『幻想のモノドロジー——日本近代文学試論』など）である。

3

以上のことを前提として、筆者は、宮沢賢治にとっての農業技術と一般的な農業技術との落差について、資料によって組み立ててみたい。宮沢賢治は農本主義者ではない、ということが出発点にある。

農会及び産業組合と宮沢賢治の関係については、大島丈志『宮沢賢治の農業と文学』（蒼丘書林、2013年）という先行研究がある。この論考の特徴は、「岩手県農会報」などの具体的な史料をもとに、農業技術者としての宮沢賢治を社会的に位置付けたことにある。それまでは、川原仁左衛門編著『宮沢賢治とその周辺』（1972年）のように、宮沢賢治との交流を回想しつつその伝記的事実をさぐり、あるいは、それを作品理解につなげていくというものが多かった。

ここで、農会についての概略を述べておきたい。農会とは、農業改良のために結成された組織のことで、1899年に成立した農会法によって法定団体となった。それ以前にも農談会や大日本農会という組織はあったが、国を挙げての法定農業団体としては画期的なものであった。大正時代には、帝国農会を中央組織として、各府県に一つ、その下の各郡に一つずつ、さらにその下の各町村に一つずつ設置され、いわゆる系統農会が整備されていた。それは統制的農政が

確立したことを意味する。系統農会の役員は、地元の名望家であったり有力地主であったりすることが多かったので、組織として例えば小作争議を解決するような性格はもたず、後には行政の下請けのような性格を強める農会も多くあった。玉真之介¹⁾によれば、系統農会の「最も基本的な性格」は「官民協調の農事改良機関」であるとする。

例えば、『大典記念 岩手県紳士録』（岩手県実業青年倶楽部、1916年）で確認できることは、当時の岩手県農会会長が天津麟平であり、天津麟平は同時に岩手県知事であり、岩手県教育委員会会長であり、地方森林会議長（この森林会のトップ）でもあることだ。

また、『系統農会役職員名簿 昭和7年』（帝国農会、1932年）で確認できることは、当時の岩手県農会会長が、澤田末吉であり、技師兼幹事が福土進、技師が大森堅弥であり、後に、『宮沢賢治とその周辺』を出版することになる川原仁左衛門は、このとき小原忠とともに「技手」であったことである。澤田末吉は、同時に花輪村の村長（大正10-昭和8）でもあった。

このことは、文学作品にも反映されている。例えば、有島武郎「星座」において、「小学校の三年を卒業する時から、自分は優れた天分を持って生れた人間だとの自覚を持ちはじめた」清逸は、卒業式の時に、「加藤という少年」が読む「答辞の文案を作ってやるのだが、卒業式当日に貴賓席にかけてそれを聞くのは、「郡長や、孵化場長や、郡農会の会長」であり、小学生の清逸にとって、その地域の秩序を代表する名士たちの一人が「郡農会の会長」であったことを明示している。

同様のことは、農会とは別の組織としての産業組合についてもいえる。産業組合については、大島丈志『宮沢賢治の農業と文学』において詳しく記述されているが、『世界大百科事典』（平凡社、1998年）における加藤和俊執筆の項が簡明でかつ網羅的である。以下に大正期についての記述を引用する。

第1次大戦の影響で農村経済が潤った時期に、組合員は100万人から200万人へと倍増したが、大戦後の1920年代、30年代には、不況・恐慌の下で農業経営が困難に直面し、地主と小作人との争いが激化したので、政府は産業組合の育成・普及を農業政策の重点とした。1923年の産業組合中央金庫と全国購買組合連合会の設立、産業組合への低利資金の多額融通などはこの一環である。また、1933年から官民総がかりで展開された産業組合拡充計画の効果は大きかった。それは農業・農村の統制・誘導を役場、小学校、農会、産業組合の4団体によって行わせるものであったから、農村在住者は直接に組合員となるか、農家小組合など

1) 「両大戦間期における系統農会の組織的発展と経営改善事業」（『北海道大学農経論叢』第42集、1986年2月）

を介して間接的に産業組合事業を利用するかの違いはありながらも、産業組合事業に組み込まれざるをえなくされた。

この時期に産業組合の性格は大きく変化した。それは地主・上層農民など農村内の一部の者だけが参加していた組合を、農民全階層を加入させるに至ったこと、それに対応して、それまで信用事業中心であった組合が、販売・購買事業をも大きく発展させて、四種事業兼営組合となったこと、である。こうして、従来、任意加入の協同組合である産業組合は、事実上全員加入の半行政団体の性格を強めていった。

先述したように、農会と産業組合は別組織ではあるが、両者とも農商務省が深く関わっていたのであり、これらに国民高等学校を加えて三者の関係を考察すると、大正から昭和にかけての農村改良運動の実像が浮かび上がり、かつ、宮沢賢治の活動の一端も見えてくるだろう。

「農業・農村の統制・誘導を役場、小学校、農会、産業組合の4団体によって行わせるもの」になった結果農村のリーダーが可視化され、彼らが揃って対抗リレーをするという光景を描いたのが、葉山嘉樹のエッセイ「運動会の風景」である。このエッセイにおいて、「肥え担ぎ競走は、おそらく農村独特の増産競技であった。役場と産業組合と国民学校の対抗リレーで、スタートには村長と、組合長と、校長とが並んだ」という記述が印象的である。

4

宮沢賢治は、詩「産業組合青年会」を1933年（昭和8）9月に雑誌「北方詩人」に送稿している。この詩は、翌月掲載された。この頃、病状が悪化し、10月21日に37歳で病死する。したがって、詩「産業組合青年会」は、死亡する直前の賢治を知る資料でもある。この詩には1924年10月5日の日付があり、その後、「北方詩人」に発表するまでの間にも推敲された。

筆者は、この詩のタイトルが「産業組合」ではなく「産業組合青年会」であることに注目しておきたい。この青年会の出席者が具体的に誰であったのかについて筆者は知らないが、村の古老でないことは推測できる。詩「産業組合青年会」を知るには、それが発表された年が1933年であったことも重要なのだと思う。詩「産業組合青年会」の意義は、青年会にある。しかし、産業組合青年会が当時実際にあったかどうかについて、筆者が調べ直している資料のなかからは確認できない。産業組合はあったのだから、その組織内で若手を中心とする青年会があったらという推測は出来るが、産業組合青年会があったことの資料的確認はまだ出ていない。あるいは、産業組合のなかに若手を中心とする集まりがあり、それを称して産業組合

青年会と言った可能性、つまり通称であった可能性もある。しかし、産業組合内には、若手を中心とする産業組合青年連盟（略して産青連）が1933時点で実際にあった。しかも、それは、1932年10月の「農山漁村経済更正計画ニ関スル件」という政府訓令に端を発して、「1933年から官民総がかりで展開された産業組合拡充計画」のなかで、全国津々浦々にまで産業組合を飛躍的に発展させる中心的役割をになっていたのである。

それをよく示す資料が、『産業組合運動と青年の任務』（産業組合宣伝叢書第二〇輯、産業組合中央会、1933年）である。この本は、読者層を意識してか総ルビで読みやすく、また、やや扇情的な文体をもつ点が特徴といえる。例言で、産業組合拡充計画について「本計画遂行の楨杆となるものは青年の産業組合運動を除外しては考へられない」とし、「我農村は餓死線上にまで追ひつめられた」と農民になりかわって資本主義を呪うように記述し、産業組合は「遂には、資本的企業の存在を必要としなくなる」「民衆の組織」であるとする。

中嶋信²⁾によれば、「産青連運動は農村の天皇制政府の及ばない部分において更正運動をくり広げる実働部隊の役割を受け持った」のであり、その運動の内部に「農村の窮乏を招いた基本的矛盾には手を加えず、なおかつ大衆を組織するという政策の内的矛盾」を孕んでいた。一方、産青連が設立される以前の北海道においては「産青連設立に対する産組指導部や道庁の逡巡」があり、その事情は「当時の道庁社会教育課長の『産青連は赤いから警戒せよ』という指示談に端的に示されている」とする。その後、1933年4月に産業組合青年連盟全国連合が結成され、組織は急速に拡大するが、「それまでの自主的な運動が展開の条件を拡大したことは事実であろうが、この組織拡大の多くは『青年団にそのまま産青連の看板をかかげる』ような形で進行した」のである。

筆者は、詩「産業組合青年会」の場面は、実際には1924年10月5日の日付で思い起こすことができる産業組合の会合であり、そこには青年が多かったし、町村の青年会に重複して所属したものも多かったと推測する。繰り返すと、それは、1924年10月5日の心象スケッチであったということである。栗原敦「はげしく寒く——『産業組合青年会』と『業の花びら』」³⁾によれば、「産業組合青年会」という表題は「『定稿用紙』になって初めて記された」ものだ。「初めて記された」その時期は、昭和3年頃の可能性もあるし、昭和8年（1933年）にまで及ぶ可能性もある。確かなことは、「産業組合青年会」という表題を持つ詩を1933年9月に雑誌「北方詩人」に送稿したことである。

筆者は、「産業組合青年会」という表題を付けた時期が昭和8年頃であると仮定すれば、「産

2) 「産業拡充運動と産青連」（『北海道大学農経論叢』第30集、1974年2月）

3) 『宮沢賢治 透明な軌道の上から』所収、新宿書房、1992年

業組合青年会」という表題の詩を発表しようとした行為そのものが、「産業組合青年連盟」への批評であったという可能性を想定している。それを実証する資料はないので仮説でしかないが、「祀られざるも神には神の身土がある」という詩句に注目しておきたいのである。

産業組合とは別組織で市町村の青年会はあったし、青年団もあった。おそらく、小さな町村においては、それぞれの団体のリーダーたちの絶対数は限られていたので、重複してそれぞれの団体に所属することも多かったのではないだろうか。

そのことは、例えば、田中光「近代日本の地域経済発展と産業組合——長野県小県郡和村の事例——」⁴⁾で論じられている。この論において、「産業組合の総会が和小学校で開催されたことや、組合長が組合設立と同時期に設立された和村青年会長にも就任したことが示すように、和村において産業組合と青年会および小学校は緊密な関係を持っていた」のであり、「1906年時点で和村青年会の構成員中で産業組合に加盟している者がいることから、創設期の和産業組合の組合構成員に、村内の若年層が多く含まれていた可能性は高いと考えられる」とし、その構成員について、次のように述べる——「設立当初の和産業組合は6名の理事、3名の監事を有し、彼等は村内の他の組織と強い連携を持っていた。もっとも中心的人物である産業組合長は、1903年10月には村内に新たに創設された青年会の会長にも推挙されて就任している。1894年に東京専門学校（現早稲田大学）を卒業した後に地元に戻ってきた人物で当時29歳だった。残り8名の理事・監事中には、1903年までに村内の役職（村長・助役・収入役）を務めた経験がある者が5名いた。和村産業組合と村自治体当局との強い連携を示唆する事実である」。

産業組合は、農学校教師であった賢治の教え子にとって就職可能な職場でもあったのかもしれない。しかし、各農学校が発行している卒業生名簿の類いに就職先として掲載されている事例を、筆者はまだ見つけていない。

後述する林田逸喜（県立熊本農業学校卒）の場合には、昭和7年に熊本県農林主事と産業組合熊本支会理事を兼務している。この一つの事実から類推して言えば、産業組合を実際に企画運営していたのは、それぞれの県や郡の産業主事及び主事補、農業主事及び主事補、あるいは県や郡の技師や技手などであった可能性がある。または、和村産業組合のように、町村の役職にある（または、あった）ものや、青年団のリーダーなどが兼務していたのかもしれない。

詩「産業組合青年会」における「これら熱誠有為な村々の処士」は、上記のような人々であった可能性がある。

岩手県において技師や技手となった農学校卒業者の具体的資料について、現時点で筆者の手

4) 「経営史学」第46巻第4号、2012年3月

元にある資料はわずかである。

例えば、『岩手県農学校年報 明治36年』（岩手県農学校、1904年）という資料がある。この資料には、岩手県農学校の第1回卒業生と思われる「明治三十四年三月卒業」10名、そして、「明治三十五年三月卒業」20名、「明治三十六年三月卒業」31名、「明治三十七年三月卒業」21名、それぞれの名前や明治37年時点での職業などが掲載されている。「明治三十四年三月卒業」10名の職業は、「実業」（農業と思われる）5名、兵役3名、「一年志願兵」1名、岩手小林区署営林主事1名であり、「明治三十五年三月卒業」20名の職業は、「実業」6名、兵役2名、陸軍歩兵少尉1名、陸軍歩兵見習士官1名、渡米2名、岩手県立農学校助教諭1名、三春葉煙草専売支局技手1名、愛媛県新居郡立農学校助教諭1名、青森大林区署営林主事1名、六原軍馬補充部勤務1名、盛岡市役所在勤1名、山梨県農事試験場技手1名、岩手県農事巡回教師1名である。

その後の卒業生も含めて、『岩手県農学校年報 明治36年』から導き出すことができる結論の一つは、農学校は、近代農業の指導者を育てるための学校であり、農民として「実業」に就く者はおよそ半数以下であること、（広い意味での）官吏や教員になる者が多かったことである。

このことは、『岐阜県立農林学校一覧 大正6年9月』（岐阜県立農林学校、1917年）からも確認できる。この資料には、「大正六年九月調」として「卒業生一覧」が掲載されている。「現今ノ業務」の欄があり、農科「第一回卒業生」（明治36年7月卒業）19名のうち、「自宅実業」は2名のみで、農事講習所や農事試験場、専売局、各所の系統農会などで「技手」になっている者は8名である。また、農科「第十五回卒業生」（大正6年3月卒業）53名のうち「自宅実業」は23名、小学校教員は9名、農事試験場研究生6名、上級学校や教員養成所などで在学中のもの6名などが確認されるが、「技手」はいない。「大正六年九月調」の段階では、卒業したばかりですぐに「技手」にはなれなかったのかもしれない。注意しておきたいのは、『岐阜県立農林学校一覧 大正6年9月』を読む限りでは、「現今ノ業務」として産業組合の技手や技師の記述はないことである。『各学校卒業生状況報告 明治44年10月現在』（石川県、1912年）に記載されている、「石川県立農学校卒業生徒調査表」によれば、石川県立農学校農科の卒業生（明治11年～44年）の卒業生の就職者計371名の内訳は、「農業」161名、「官公吏」165名、「教員」41名などである。

以上のことを踏まえつつ、農会技手や産業組合技手についてももう少し岩手県の全体像がわかる資料を探しまとめることを今後の課題とし、本稿では、参考資料として、『南園群像』上巻（1983年）を挙げておきたい。これは、熊本県立熊本農業高校同窓会「南園」の編集発行によ

るもので、熊農卒業生の中から67名の群像を描き出そうとしたものである。本稿において、県立熊本農業学校に焦点をあてる理由は、宮沢賢治が「農界の権威」と記した坂本謙平が県立熊本農業学校卒業生であるからでもある。

例えば、林田逸喜（2回卒）は、明治20年生まれ。「下益城郡の地主の長男」として生まれた。明治29年に生まれた宮沢賢治よりも年上になる。「昭和のはじめ頃小作料として受け取っていた千俵近くの」米を収入とする地主の家に生まれ育ち、「熊本農業学校卒業後は松橋高等小学校・球磨農業学校・青年学校で教鞭」を取り、「二十才で入隊二年で看護上等兵を退き、豊川小学校教師の後熊本市内に出、県の産業組合の書記、技手、講師、主事等を歴任し、『産業組合簿記の手引、産業組合監査要項』等の書」を出した。その略歴の昭和7年までを以下に引用する。熊本県下では、産業組合に貢献した人物の典型であろう。産業組合を中心として県農会にも勤務し、やがて県の行政を担っていく過程が興味深い。前述したように、県農林主事と産業組合熊本支会理事を兼務することには、産業組合が行政と深い関係があることが示されている。

大正 4 年 第四回産業組合長期講習をうける

大正 5 年 産業組合中央会熊本支会書記

大正 8 年 県農会技手

大正 10 年 八代郡産業主事補

大正 12 年 県産業主事補 産業組合熊本支会主事補嘱託

大正 14 年 県農林主事補

大正 15 年 内務部商工水産課

昭和 4 年 全国産業組合大会に於いて緑綬功労意（賞の誤記か——筆者記）を受く

昭和 6 年 産業組合熊本支会主事

昭和 7 年 県農林主事 産業組合熊本支会理事

林田逸喜は、戦後の昭和23年には、「豊川村農業協同組合長 県信用農協連監事 県販売農協連代表監事 豊川村農地委員」を兼務している。

この他、熊本農事試験場と熊農卒業生の関係についての記述もある。以下に引用する。

大正の年代は農事試験場の業務拡充の時代であったが、他面農事指導の主力をなした系統農会の機能も農事試験場の試験研究の成果を指導活動の中に活用して、全県的に大きく展開

した時代でもあった。また、農事試験場には、これまで農会が実施主体であった主要農作物の原・採種圃の経営が試験場の業務として、県営の方式に改められ、系統農会の農業指導の展開に対応して、技術員養成の機能が強化された時期でもあった。

この引用に続けて、「このような時代の趨勢を背景として、南園の学窓を巣立つ多くの人材が、試験の領域に進出した。このころ農事試験場の職員で南園関係者をみればおよそ次のような人たちであった」として、以下のような研究が紹介される。岡本三千年（2回卒）「主要農作物の原種育成採種圃経営」、坂本謙平（7回卒）「小麦に関する試験 技術員養成」、坂本末人（9回卒）「土壌肥料に関する試験」、藤本虎喜（10回卒）「主要作物の栽培法の試験研究 技術員養成」、右田己取（12回卒）「土壌肥料に関する試験」、奥村昌孝（12回卒）「主要作物、雑穀に関する試験」。このなかで、坂本謙平については、拙稿「宮沢賢治と熊本——坂本謙平のこと」⁵⁾で述べた。宮沢賢治と坂本謙平が出会ったとすれば〈いつ・どこ〉でなののかについてはいまだに不明であるが、宮沢賢治が「農界の権威」とまで言及した坂本謙平について、彼が熊本県下で飛び抜けて有名な農業技師というわけではなかったことは、その後の調査でもわかりつつある。この時期、熊本における農会・農事試験場・産業組合等の人々は、それぞれの課題に勤勉に取り組んでいた。彼らは、科学者というよりも、目の前にある日々の現実的課題を実習や実験によって解決しようとする農業技術者であった。おそらく、日本全国でこのように勤勉な農業技術者たちが日々努力することで、近代農業への転換が図られてはいたのだろうが、その歩みは結果としては遅々としていた。

また、『南園群像』によれば、「大正期をはさんで、明治末期から昭和十年代に亘って熊農を卒業した人たちが、県農会の田島、満田を頂点として、郡町村に及ぶ裾野の広い組織が県下農事指導の主力を形成していた」のであり、熊本県農会6名、熊本市農会3名、その他の郡農会27名、計36名の名前と卒業回を列記している。町村農会については、資料が無いようである。熊本県には岩手県のような高等農林学校がなかったので、熊本農業学校が農業技術者を多く輩出することになったのであろう。

『南園群像』から垣間見ることのできる熊本県の大正から昭和初期の状況に、農業技師宮沢賢治を置いてみる。総論としては農業近代化の方向性は一致しており、各論的には孤立していると言えるだろう。

5) 『幻想のモノドロジー 日本近代文学試論』所収、翰林書房、2015年

5

吉本隆明の『宮沢賢治の世界』にもう一度もどって考えてみる。吉本によれば、宮沢賢治の科学観、自然観の「とても大きな柱の一つ」が、「自然というのは変えられる」ということであった。宮沢賢治の場合、自然のその変え方が急激である傾向、言い換えれば、一挙に自然を変革して人間に幸福をもたらそうとする傾向が顕著である。段階的で現実的なのではなく、そこに夢や空想が入ってしまうという傾向でもある。グスコブドリは、かくしてカルボナード火山を人工的に爆発させ、「地球全体を平均で五度ぐらい暖かくする」ことによって、この地域を冷害から救おうとする。「〔或る農学生の日誌〕」では、「気候さへあたり前だったら今年は僕はきつといままでの早魃の損害を恢復して見せる」と決意する。北海道修学旅行の記録である「〔修学旅行復命書〕」においては、「札幌麦酒会社」の糖化室、機関室、瓶詰工場を見学し、「古き麦酒瓶数十の列河水流るゝが如く機上を転じレットを剥離せられ磨洗水洗填充賦栓より新なるレットを得麦稈の衣を装ひ二打の木函に容らるゝまでその巧妙なる機転驚嘆せざるなし」と記したすぐその後で、「然れども斯の如き今日の工業中にありては実に稚態茶飯事に過ぎず。大約人類の苟も思想する処何事か成ぜざらん。工業と云ひ農業と云ふ勢力と云ひ物質と呼ぶ何物か思想に非らんや。唯複雑にして征服し難き農業諸因子の中に於てその進歩容易ならざるのみなり。夫、長方形密植機の如き太陽光線集中貯蔵の設備の如き成らんか今日の農民皆々十一時間を労作し僅に食に充つるもの工場労働に比し数倍も楽しかるべき自然労働の中に於て之を享樂するの暇さへ無きもの将来の福祉極り無からん」と述べる。宮沢賢治は夢見る農業技術者であったのだ。

大島丈志は前掲書で、「賢治もあえて、投機的ともいえる新しさをもった企画をも含めて農村の変革を行おうとしていた」（同書 32 頁）、「賢治が副業に対して、かなり現実的な構想を持っていた」（同書 146 頁）、「客観的にみて賢治の農業実践は孤独ではなかった。むしろ賢治の農業思想に賛同する雰囲気があったと考えるほうが妥当」（同書 171 頁）、「賢治には化学肥料を多く使用し大増収を狙うという山師のような構想があった」（同書 176 頁）、と述べた。賢治の農業実践を現実的かつ合理的な構想に基づいたものとする見解である。「山師のような構想」についても、夢によってではなく現実的な利益を計算したうえで行動する農業技術者という賢治像を提示している。筆者も、基本的に大島の論に賛同する。

筆者が、宮沢賢治は夢見る農業技術者であったと述べるのは、彼のなかにある現実と理想のバランス、現実を踏まえた空想へ傾斜していく思考の独自性などに注目するからである。ある局面において、宮沢賢治は現実的な構想をもち、かつそれを実践したということを論考として

まとめるのは至難のわざであったが、大島丈志の前掲書は、そのことにほぼ成功している。

本稿では、根本的には宮沢賢治の肥料設計とは何であったかについて、その前提となる農業技術者としての側面を述べた。今後は、日本各地の農事試験場、農会などにおける土壌肥料に関する研究や技術員養成について調べる必要があるがひとまず筆を置く。

※本稿は、明治大学農学部教授松下浩幸氏との共同研究「宮沢賢治における農学的エピステーメーの受容について」（明治大学特定課題研究ユニット 2016年度）における成果の一部である。

Summary

Miyazawa Kenji and Agriculture

In this paper, I mentioned aspect of agricultural engineer in Kenji Miyazawa.

Kenji Miyazawa' s view of science and view of nature was that "nature can be changed". In the case of Kenji Miyazawa, there is a tendency that the way of changing nature is rapid. Rather than being a scientist, he was an agricultural engineer trying to solve realistic tasks in the eyes one by one through practical training and experiments.